



「共感(同感)」 ～パラダイムシフトの推進力～

株式会社日本政策投資銀行
東海支店長 光本 滋

突然ですが、ルーレットで赤が5回続いたら次は黒にかけませんか？

11%の確率で1万円貰えるよりも、10%の確率で12千円貰える方を選びませんか？
スーパーで、後から来た隣の客が先に支払いを済ませたら、店にイライラしませんか？
これらは、人間は合理的ではなく、その時々で感情で動くことを示していると言います。

昨年10月に、シカゴ大学のRセイラー教授がノーベル経済学賞を受賞しました。彼は、合理的経済人の仮定に異議を唱え、経済的意思決定に影響を与える心理的特性を明らかにしました。その中の一つが「社会的選好」です。これは、公平性や他者の利益も考えて行動するという、ボランティア、寄付に代表される行動を指します。

また、最近では「注文を間違える料理店」が話題となりました。料理はプロが作り、認知症を抱える人達がホールスタッフとして働く期間限定のレストランです。クラウドファンディングでの資金集めも話題となりましたが、客側が間違いを受け入れ共に楽しむことでスタッフのモチベーションがアップ、間違いも減ったということです。

現在、IoTやインターネットによる経済のパラダイムシフトが進んでいます。その行き着く先は「限界費用ほぼゼロ」の世界です。IoTインフラで多数の人が繋がり、金銭的価値ではなく社会的価値に重きを置く協働型の利益に動機づけられ、財やサービス、経験を他者とシェアしたいという欲求がインセンティブとなる世界です。

かつてアダム・スミスは、「人間は、どんなに利己的であっても、明らかに、他の人々に関心を持たせ、他人の幸福を自分に必要なものとする原理がある」として「同感(Sympathy)」という言葉を用いました。20年ほど前には、他者の行動を見ているだけで、同じ体験を自分の脳内でまねる神経細胞ミラーニューロンが発見されていますが、これまで以上に「同感」「共感」が世の中を変えて行く推進力となるのでしょうか。

こうしたなか、私共日本政策投資銀行(DBJ)は、第4次中期計画「変化に挑み、未来を創る3年間」を策定しました。パラダイムシフトが進む中で、様々な金融機関や事業会社様と連携・協働しつつ、経済価値と社会価値の両立に取り組んでいきますが、その際、地域の皆様から如何に「共感」を得られるかを常に意識して行動して参りたいと思います。